

「次世代への働きかけ」

男女共同参画推進連携会議
「次世代への働きかけ」チーム第1回会合資料

工藤 由貴子
横浜国立大学教育人間科学部

日本社会における若者の現状・意識をみながら、 わたしたちは何ができるか 何をしなければならぬか考えます

* はじめに

第4次男女共同参画基本計画の策定

において課題にされた「固定的性別役割分担の解消」
について

* 若者の現状と意識から

* 次世代のために行われてきたこと

* これから行っていきたいこと

はじめに

- * 固定的性別役割分担の3つの側面
 - 固定的性別役割分業観(社会の規範)
 - 意識(当事者の)
 - 分業体制そのもの

固定的性別役割分担意識

「夫は外で働き、妻は家庭を守るべき」

支持 男性55.2% 女性48.4%

20代 男性55.7% 女性43.7%

と若い人たちの支持率も高い

内閣府「男女共同参画社会に関する世論調査」H25.3

「家事は主に妻にしてほしい」

* 20代未婚男性 支持40% 未婚女性50.6%

「家事は主に自分がした方がいい」

* 20代既婚男性 40.4% 既婚女性 71.7%

男性は収入が高いほど、女性は収入が低いほど
支持する割合が高くなる

内閣府 男性にとっての男女共同参画に関する意識 H24.3

分業体制そのもの

(1) 就労の場におけるジェンダー構造

- 女性の管理職（主任以上） 約1割
- 女性は非正規雇用の割合が高い
- 男女間の賃金格差が大きい

- M字型就労形態である
- 性別職域分離
- ワークライフバランスが困難
- 職場環境 ハラスメントが減らない

(2) 家庭生活・地域社会におけるジェンダー構造

* 男女の家事時間の比較

圧倒的に男性の家事時間が少ない

国際的に見てもその差は際立っている

* 地域活動参加率は女性が高い

意識決定ができる立場には男性が多い

「固定的性別役割分担の解消」のためには 男性型社会・男性中心型労働の変革を

固定的性別役割分担の解消 その妨げになっているのは

①男性正社員を前提とした長時間労働

②既婚女性の家計補助的な非正規雇用 を特徴とする働き方

③共働き世帯の増加等社会経済状況の変化への対応が
できにくい税・社会保障制度

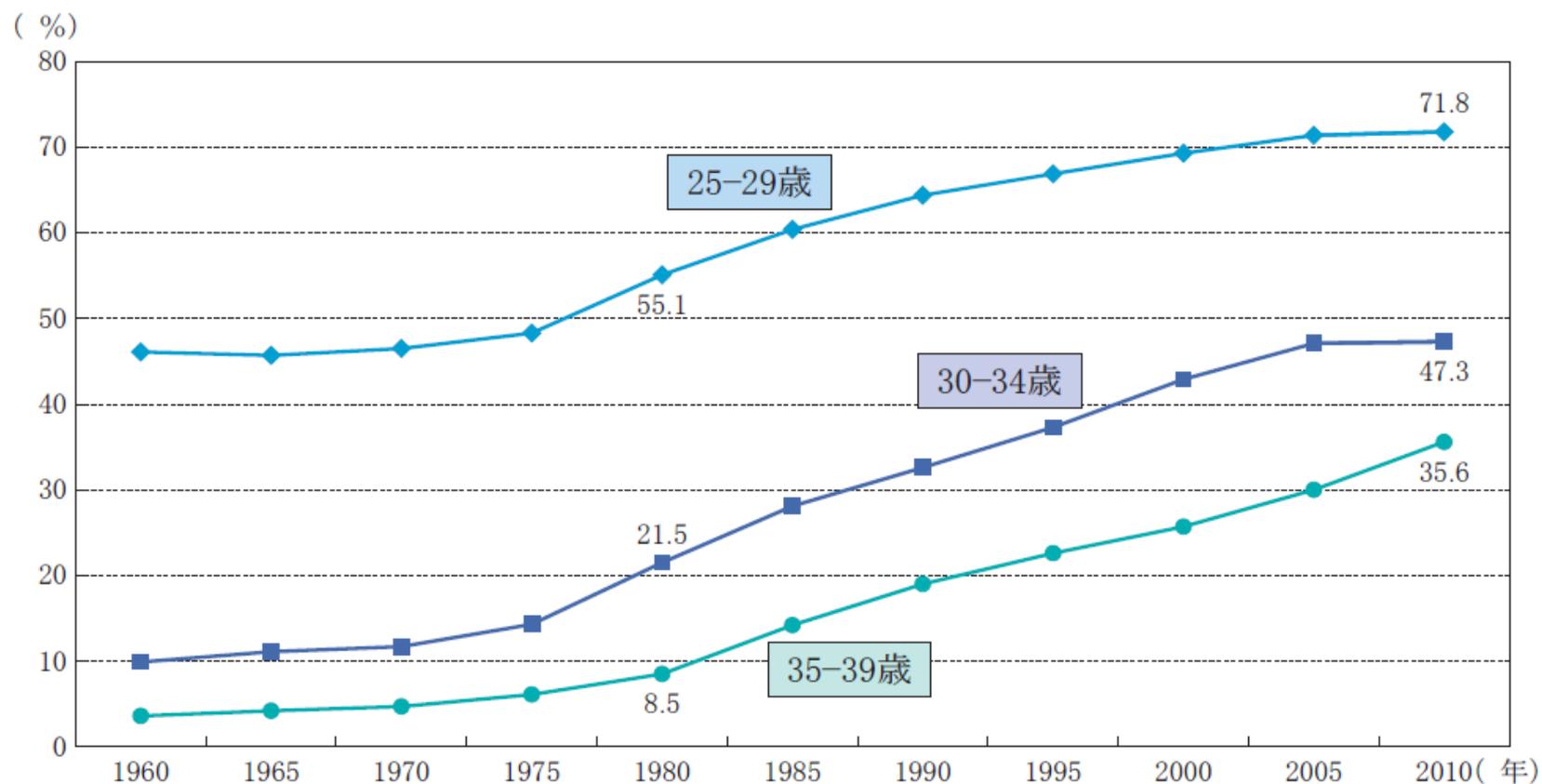
③男性の家事・育児・介護等への参画、地域社会への参画が不十分

これらを変革していくこと

1. 若者の現状から考える

- * 年齢階級別未婚率
- * 生涯未婚率
- * 皆婚社会の崩壊
- * 家族状況の多様化

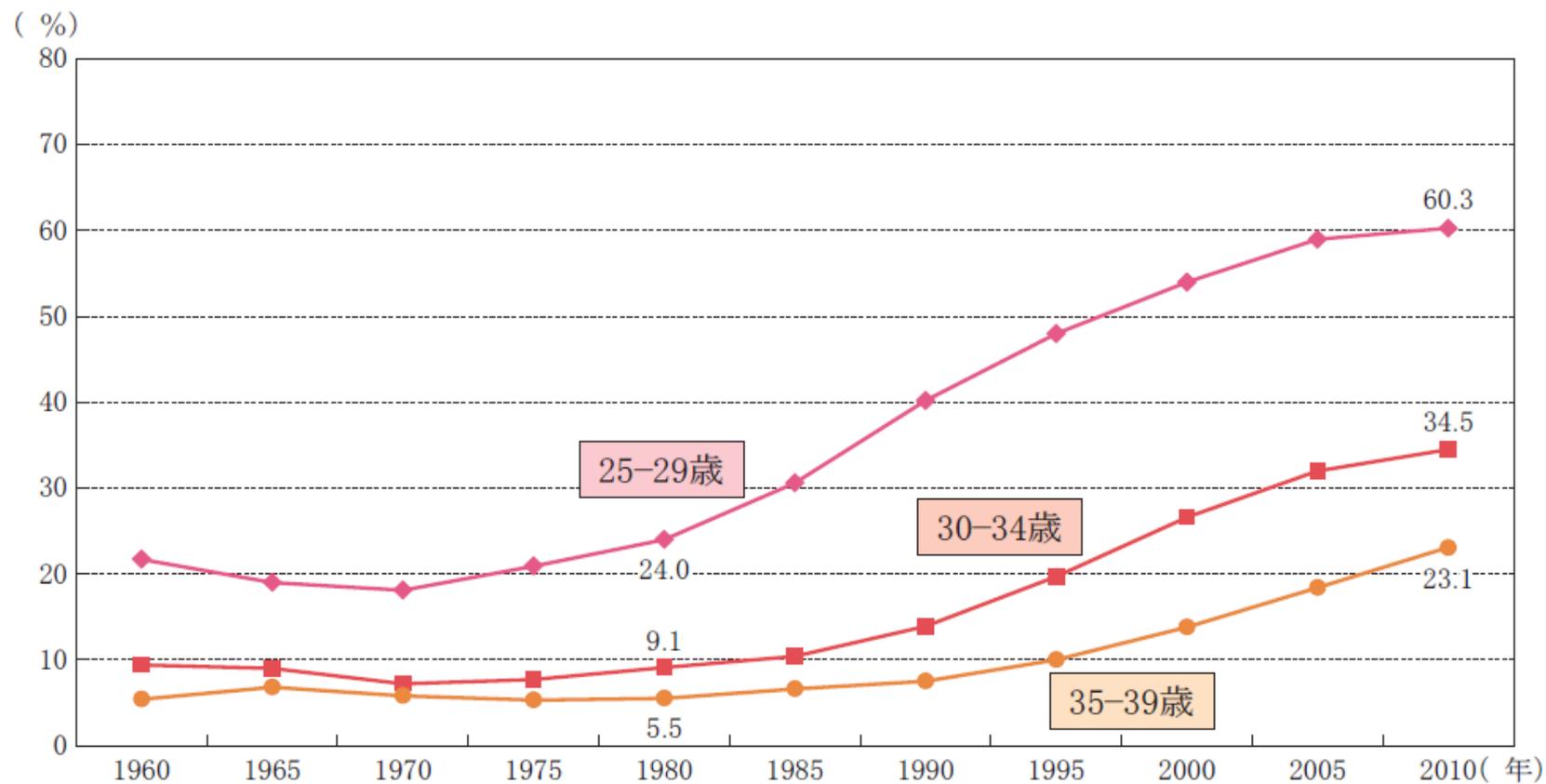
第1-1-2図 年齢別未婚率の推移(男性)



資料：総務省「国勢調査」(2010年)

注：1960～1970年は沖縄県を含まない。

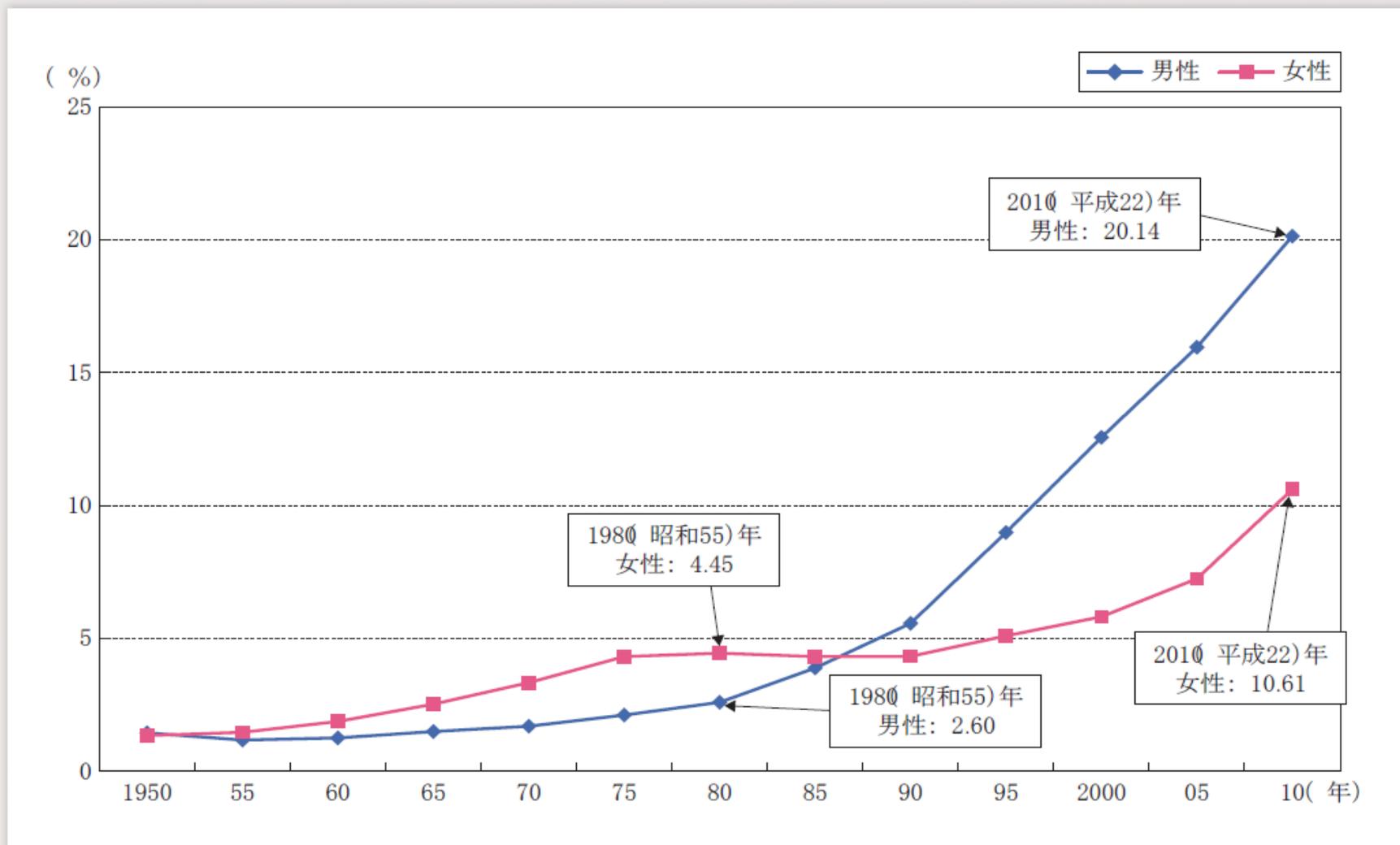
第1-1-3図 年齢別未婚率の推移(女性)



資料：総務省「国勢調査」(2010年)

注：1960～1970年は沖縄県を含まない。

第1-1-4図 生涯未婚率の年次推移



資料: 国立社会保障・人口問題研究所「人口統計資料集2013」

注: 生涯未婚率は、45～49歳と50～54歳未婚率の平均値であり、50歳時の未婚率。

家族状況の多様化

* 1995年生まれ(2015年に20歳)の女性

- 生涯未婚率 20.1%
- 既婚・子どもなし率 15.5%
(生涯無子割合 35.6%)
- 既婚・子どもひとり 18.2%
- 既婚・子ども2人 30.3%
- 既婚・子ども3人以上 15.9%

国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口」平成24年1月推計 (中位仮定)

固定的性別役割分担が機能していた時代

- * 固定的性別役割分担は日本の高度経済成長期に一般化
- * 高い雇用率 低い失業率
- * 会社による一家の生活保障
- * 正社員夫・父を大黒柱とする安定した核家族
- * 核家族による生活保障
- * 高い婚姻率 皆婚社会

例えば、その時代のライフコース

- * 若者はパラサイトシングル
リッチに生活を楽しむ余裕
- * 男女とも望めば正規雇用
正規雇用であれば終身雇用 年功序列型賃金
正規雇用と結婚すれば豊かな経済生活が可能
- * 40代 ほとんど結婚して子育て中
夫は仕事で、妻は家事 分業で豊かな生活を築く

でも今は

- * 1990年以降の社会構造の転換 日本型雇用・日本型福祉社会の崩壊
- * 家庭という生活保障機構の脆弱化
単身世帯 1人親世帯 働き手のいない世帯
- * 大黒柱の消滅
- * 非正規雇用化
- * 一家の支え手である配偶者を得ることのできない女性の増加
- * 早い時期に親から経済的自立を迫られる若者
- * 親に頼られる若者
- * 会社という社会保障機構の弱体化
- * 超高齢社会

- * 固定的性別役割分担を解消し
- * 男性も、女性も、親・子どもの有無にも関わらず、
- * 主な働き手の男性とセットでない女性も、主な家事の担い手の女性とセットでない男性も

「自らの意思に基づき、仕事、家庭生活、地域社会のあらゆる分野において、個性と能力を十分に発揮しながら生きていける多様性に富んだ社会」を創らないと

- * 結婚できない人はますます増える
- * 貧困に陥る人はますます増える
- * 格差は増大するばかり
- * 豊かな長寿社会も築けない
- * 持続可能な社会が実現できない

2. 若者の意識

- * 「男は仕事 女は家庭」を支持する人が多い
 - ➡ 古典的な性別役割分担意識をもっているのではない
現実適応としての新しい性別役割分担意識が醸成
されている
- * 格差社会の中で
- * 一人では食べていけない
- * 経済的不安定 どういう暮らしが可能であるか 先行き不透明
- * 男女共同参画社会はすてき 理解できる
でもすごきたいへんそう 私には無理
「みんな違ってみんな良い」の曲解

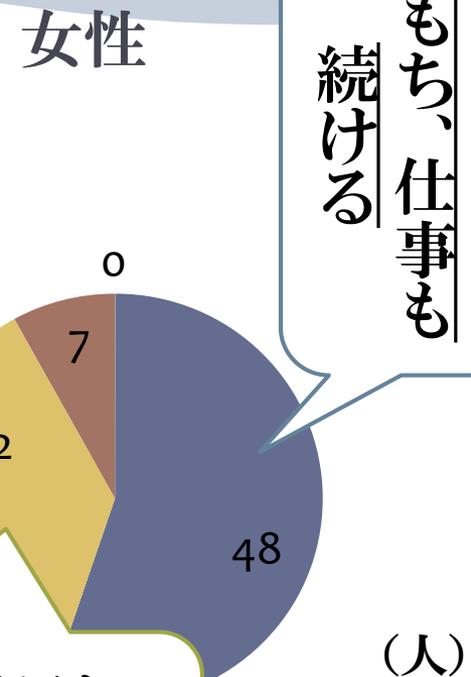
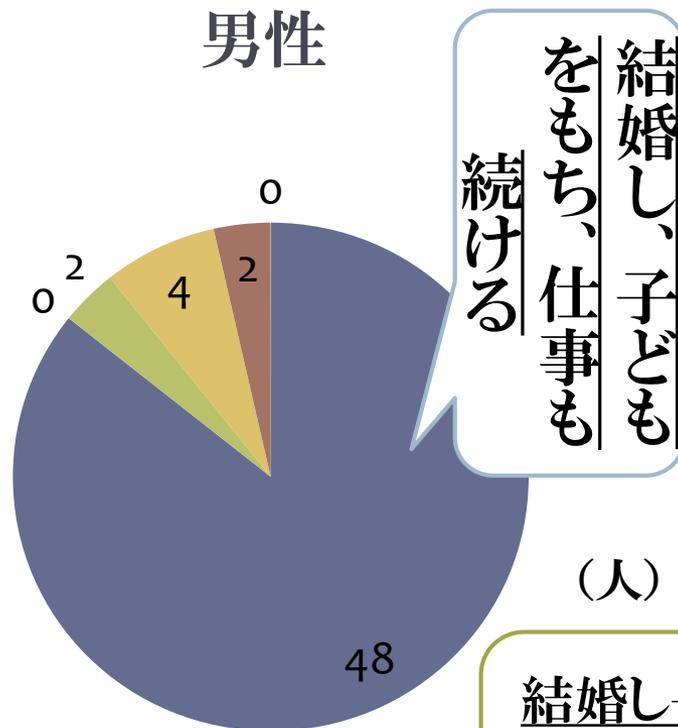
調査Ⅰ 大学生に対するアンケート調査

- * 調査時期 : 平成26年7月
- * 調査方法 : 3大学(Y大学・K大学・KJ大学)の学生(18~22歳)を対象に自記式質問紙調査を依頼
- * 分析対象 : 3大学の学生152名
(男性56名 女性93名 未回答3名)
- * 質問項目 :
 - ①少子化に関する認識
 - ②自分の希望するライフコース
 - ③パートナーに希望するライフコース
 - ④将来の生活に希望するもの

調査Ⅰ 大学生に対するアンケート調査の結果

②自分の希望するライフコース

問6 あなたは将来どのように働くのが好ましいと考えますか。
(男性はパートナーが出産した時と考えてください)

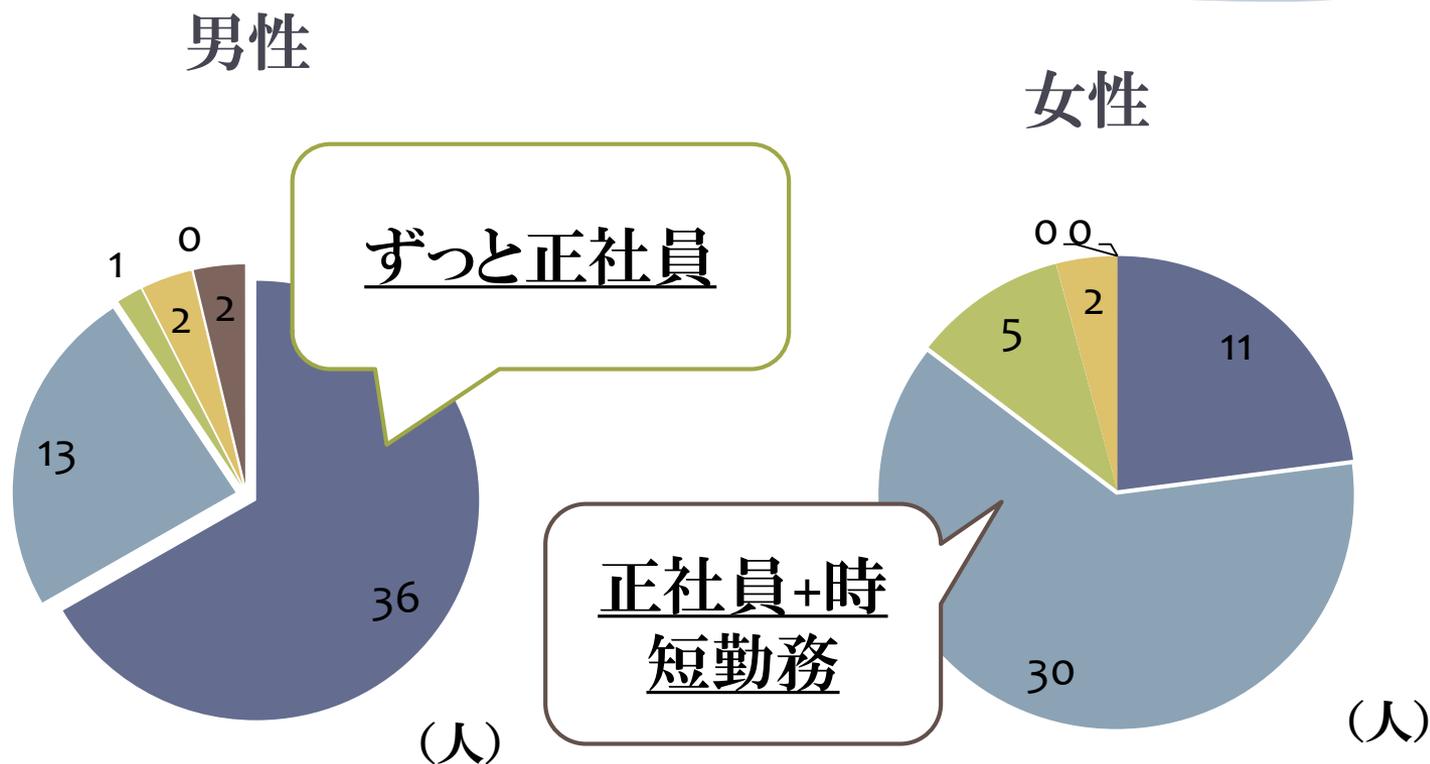


結婚し子どもをもつが、結婚あるいは出産の機会にいったん退職し、子育て後に再び仕事をもつ

調査Ⅰ 大学生に対するアンケート調査の結果

②自分の希望するライフコース

問7 あなたはどのような雇用形態を望みますか。

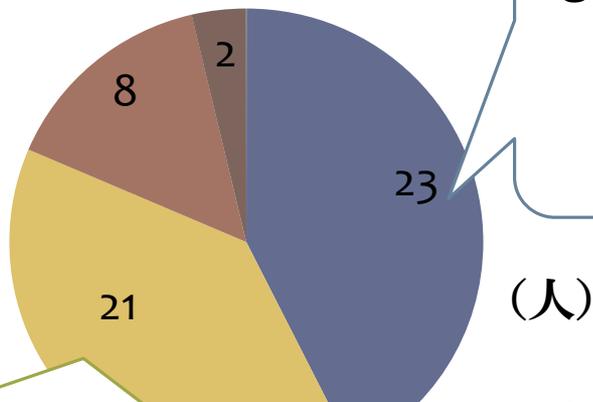


調査 I 大学生に対するアンケート調査の結果

③ パートナーに希望するライフコース

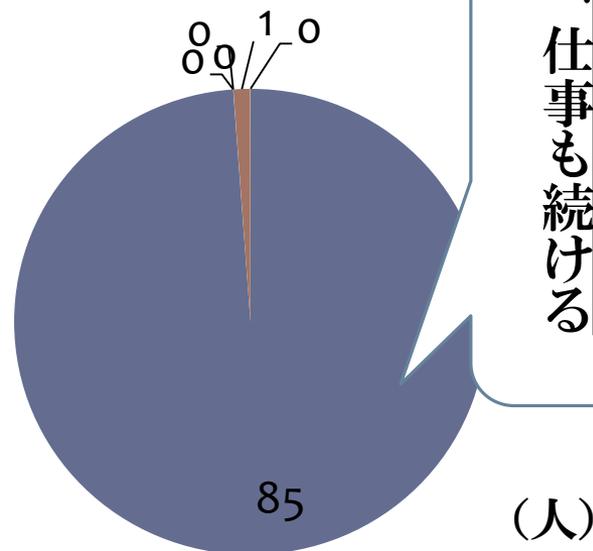
問8 あなたは将来パートナーにどのような働き方をしてもらいたいと考えますか。(男性はパートナーが出産した時と考えてください)

男性



結婚し、子どもをもち、仕事も続ける

女性



結婚し、子どもをもち、仕事も続ける

結婚し子どもをもつが、結婚あるいは出産の機会にいったん退職し、子育て後に再び仕事をもつ

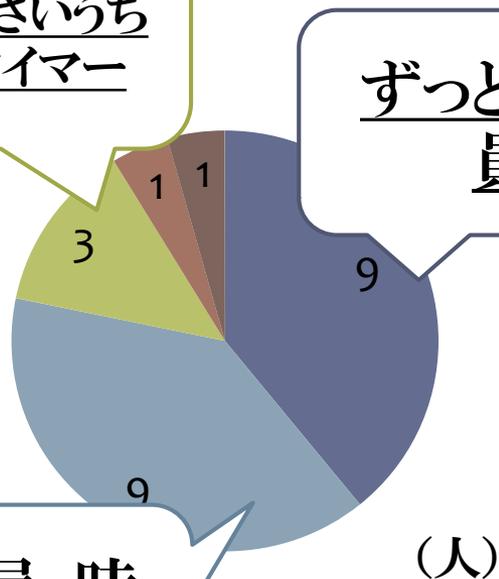
調査Ⅰ 大学生に対するアンケート調査の結果

③パートナーに希望するライフコース

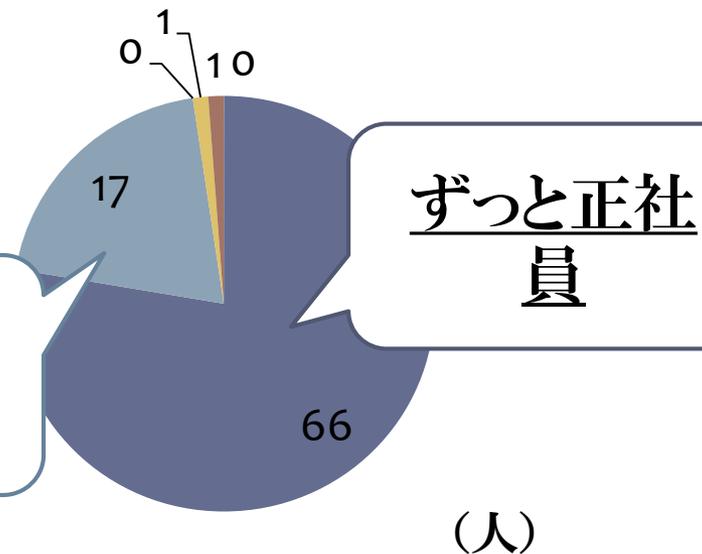
問9あなたはパートナーにどのような雇用形態を望みますか。

男性

基本的に正社員、
子どもが小さいうち
はパートタイマー



女性



* 自由記述から

「一人で稼いで生活はできないだろうから、共働きは必至」

「二人とも非正規雇用だったら、絶対に共働きになる」

「男性も女性も同じように働くことが基本だと思うが、賃金格差を考えると、子育て中は女性が家庭に入る方が世帯としてメリットがある」

「“子どもはほしいが自分で面倒を見てそだてて行きたいため、可能な限り子どもと接する時間をとれるような仕事をしていきたい」

「家で作業できるようにするか、子どもの予定中心に出勤できるような環境を作れればと思う」

対象者のうち、7名を除く学生は将来結婚すると考えている

上にみた家族状況の多様性は、今後の人生行路のプロセスで生じる

3. 次世代への働きかけ

「現代は男女共同参画社会である。固定的な性別役割
分担意識は払拭しよう！」

法律の制定

政策も

教育も

職場でも

様々なことが行われてきた

* しかし、まだ私たちは新しいビジョンを示すには至っていない。

例えば、「これからの働き方」

多様な事情に応じて働き方を選択できる社会をつくることは大事

- 若者 学校卒業後、しばらくは自分に合った仕事を試してみる期間がもれてば、不本意な就職をしたために早期転職する人が減る
- 女性 出産育児の間、短時間労働で働いた後フルタイムに切り替えられる柔軟な職場
- 男性 家事・育児の分担のために労働時間を短縮できる職場
- 高齢者 仕事と余暇のバランスを変えながら、体力が続く限り働き続けることのできる職場

というように、示しているのは、現在ある固定的性別役割分業のもとでの改善策に留まっている。

例えば、「子育ての支援」

・困難を抱えた人がそのことをしなくて済むような手助けとして捉えられていることが多い。

バリアを撤去し、その人自身が生活困難を突破し、困難に対する対抗力をもち、それを行うことによって成長していけるようにすることが支援であること、まだ十分に示されていない。

・子育てをしながら働く人にとっては、子育てをしているのだから働かなくても済むような支援策ではなく、子育てをしながら当然仕事もできる、そのための困難を取り除くという方向性を強くもった支援策が求められる。「子育ての支援」から「すべての人に働きやすい環境を求める働きかけ」へと

4. 行っていききたいこと

* 新しい社会のビジョンを示す

男女共同参画社会とはどういう社会か
できるだけ具体的に

* 意欲は結果である

意欲ある男性・女性を前提として組み立てられた論、
意欲のある人にはチャンスが与えられるではなく、
環境を整え、ジャンプ台にのせる
「やってみよう」「私たちにもできる」